

保育養成校における造形表現指導に関する考察 —多様な表現材料を用いた授業実践—

加藤 友彦*

要約

子どもの様々な造形表現活動を支援するためには、保育者が豊富な知識や技能を持っていることが必要である。そのような知識や技能は保育者自身が豊かな造形表現活動をすることによって獲得される。保育者を目指す学生であれば、入学前に豊かな造形表現活動を経験していることが望ましいが、一方で経験の乏しい学生もいる。すべての学生が、造形表現活動を楽しみ、知識や技能を習得できる造形表現の授業を構想した。

子どもの造形表現活動で実践されている題材を基本に、平面造形と立体造形、個人製作とグループ製作を組み合わせた題材で授業を実施した。授業後にアンケートを行い学生の意識を調査した。その結果、美術に対して関心・意欲の高い学生と低い学生の双方から肯定的な評価を得ることができた。授業を通して、学生が造形表現活動を楽しみ、主体的な学びができたことが明らかになった。今後の課題として、授業者の負担感の軽減、他の表現領域と関わる題材の考案、学習者の追跡調査の実施が考えられる。

キーワード：造形表現 保育者養成 授業実践

2019年9月27日受理（教育研究）

I はじめに

平成29年に告示された保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領において、育みたい資質・能力と「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が示された。保育・幼児教育で育みたい資質・能力は「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力の基礎」「学びに向かう力、人間性等」という3つの柱として示されている。示された資質・能力は個別のものではなく、子どもの遊びの中で重なり合い、3つの柱をより具体化したものが「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」である。

造形表現は「10の姿」の中で豊かな感性と表現の項目と深く関わっており、「心を動かす出来事などに

触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだり、表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる。」と記されている。保育・幼児教育に限らず、子どもの造形表現活動を援助・指導するとき「表現する前に表現したいと思うような心を耕しなさい」という言葉をよく聞く。子どもは「心を動かす出来事」がなければ表現したいとは思わないのである。次に、「感性を働かせる中で」とある。子どもに感性を求める以前に、保育者自身が豊かな感性を持ち、多様な価値に気づき、美しさに対する鋭敏な感覚を磨くことが必要である。表現活動を指導する保育者の資質として、「表現活動に関する豊かな感性が最も大切」と回答した

*大阪健康福祉短期大学

連絡先：加藤 友彦

〒690-0823 島根県松江市西川津町 4280

大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

E-mail: t.kato@kenko-fukushi.ac.jp

保育者が1番多かったという報告もある。表現が生まれるためには、子どもが表現したいと思うような体験と、そのような体験を提供できる保育者の感性が必要ということであろう。さらに、「様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き」とある。造形表現が同じ領域「表現」の中でも音楽表現や身体表現と決定的に異なるのは、「もの」を通しての表現ということである。子どもが表現したいと思い、表現しようとしたときに、保育者は子どもの思いに寄り添いながら適切に援助・指導できる資質・能力が必要である。造形表現活動の中でそのような援助・指導を行うためには、保育者自身が豊かな感性と造形表現活動の体験を持つことが求められている。保育者を目指す学生であれば、保育者となる前に様々な造形表現活動の体験をすることが望ましいと考える。

筆者は保育者養成校で造形表現の授業を15年間担当してきた。ここ数年の学生は造形表現活動の体験が不足しているように感じられる。これは生活環境の変化、中学校における美術科の時間数削減などによるものと推察される。そうであれば、保育者として働く以前に、保育者養成校の授業の中で様々な造形表現活動を体験することが必要である。筆者の勤務する短期大学で造形表現に関連する授業のひとつに「造形Ⅰ」がある。1セメスターの必修科目で1年生全員が受講する。特に造形表現活動の体験が希薄な学生に対し、この授業を通して様々な活動を体験し、造形表現を楽しみ、保育者として必要な資質・能力を身につける機会としたい。

Ⅱ 研究の目的と方法

本研究では保育者養成校における造形表現の効果的な指導方法について考察する。まず造形表現の授業「造形Ⅰ」での実践について報告する。次に学生の授業評価を分析し「造形Ⅰ」の授業を検証する。考察にあたっては以下の4つを仮説とした。

- ①保育者を目指す学生には、小学校の図画工作科（以下図工）、中学校の美術科（以下中学美術）、高等学校の美術科（以下高校美術）の学習経験によって「美術」に対して関心・意欲の高い学生と低い学生が混在する。
- ②造形表現の授業（「造形Ⅰ」）が、図工、中学美術、

高校美術とは異なる学習であることで学生の意欲は高まる。

- ③「造形Ⅰ」の授業が、「美術」に対して関心・意欲の高い学生からは肯定的な評価を受け一方で、関心・意欲の低い学生から肯定的な評価を受けなければ、図工や中学美術と同様な授業であり、保育者養成校における造形表現の授業としては不適切である可能性が高い。
- ④「造形Ⅰ」の授業が、「美術」に対して関心・意欲の高い学生、低い学生の双方から肯定的な評価を受けると、その内容は図工や中学美術とは異なり、保育者養成校における造形表現の授業としては適切である可能性が高い。

Ⅲ 「造形Ⅰ」の題材

「造形Ⅰ」の造形表現活動に関して以下の点に留意した。

- ①基礎知識の習得…色彩、形態、材料など造形表現の基礎知識が習得できる題材とする。
- ②保育に適した題材…子どもの造形表現活動で取り上げられている題材とする。
- ③多様な体験…平面造形表現と立体造形表現の両方を体験する。平面造形表現であれば描画表現と描画以外の表現を体験する。立体表現であれば紙類、粘土類、自然素材、人工素材など多様な材料を用いる。
- ④短時間の活動…90分の授業時間で準備、製作、片づけまでできる。
- ⑤活動形態の多様性…個人製作とグループ製作の両方を行う。
- ⑥製作と鑑賞の往還…製作物は次の授業時に鑑賞する。

次に、「造形Ⅰ」の造形表現活動の題材を示し、それぞれの題材設定、活動概要、学生の様子について述べる。なお、掲載した写真は全て学生の製作物であり、製作者からは掲載の承諾を得た。

(1) 造形の基礎 和紙染

【題材設定】

授業における初めての表現活動で、造形表現は色彩と形態と材料で表現する活動であることを理解す

る。紙を折る行為から始まるため、紙という材料を感じ取ることができ、折り筋に色がつき規則的な模様生まれることでレピテーションの美を感じ取ることができ、色と色が滲んで混じり合うことで色彩美を感じ取ることができる題材である。

【活動概要】

- ①屏風折りした3枚の和紙(B6)をそれぞれ、正方形折り、二等辺三角形折り、正三角形折りする。
- ②三原色を含む8色の染料を自由に用いて和紙を染める。

※製作物はコラージュに使用。

【学生の様子】

和紙染を体験したことのない学生が多く、新鮮な造形表現活動と受け止められた。折り方の手順を教え合うことで、学生同士のコミュニケーションにもつながった。

(2) 造形の基礎 切紙

【題材設定】

和紙染同様、紙を材料とし、紙を折る行為から展開する活動である。折り方によって様々な対称形を表現できることからシンメトリーの美を感じ取ることができる題材である。保育における造形表現活動の主要な用具としてハサミがある。授業者は学生がハサミをどの程度使いこなせるか把握でき、利き手と用具の準備状況の確認ができる。

【活動概要】

- ①色紙を用いて10折りと12折りの折り方を覚え、ハサミを使い試作をする。
- ②無地とプリント柄の色紙(15×15cm)から自由に3枚選び、10折りと12折りをし、ハサミを使い美しい対称形を3つ作る。
- ③3つの対称形を画用紙(27×19cm)に自由に構成し、スティック糊で貼る。

※製作物は学内に1週間展示した。

【学生の様子】

学生は2つ折りや4つ折りの切紙の経験はあっても、10折り、12折りはほとんど体験したことがなかった。積極的に取り組み各自が工夫して美しい形を生み出した。かなり複雑な形をつくる学生もいた。

(3) 身体感覚と絵具 フィンガーペインティング

【題材設定】

子どもの造形表現活動のもととなる豊かな感性は身体感覚を通して培われる。特に触覚を通じた活動が重要である。手指に直接絵具をつけてかくことで、かくという根源的な行為を確認する活動である。また、絵は筆で描くという固定観念の打破にもつながる。

【活動概要】

- ①感情をテーマに、ケント紙(8切)にボディーペインティング用の「ゆびえのぐ」5色を自由に用いて、手指で抽象的に表現する(図1)。
- ②次の授業で、展示された製作物を鑑賞する。

【学生の様子】

学生は、最初は「ゆびえのぐ」の冷たくぬるっとした感触に戸惑っていたようだが、次第に夢中になって活動するようになった。ダイナミックな表現もあれば繊細な表現もあり、各自の個性が表現された。初めての鑑賞活動では、様々な表現を肯定的に受け止め、適切に記述することができた。

(4) 描画材 バチック

【題材設定】

子どもの造形表現活動でよく用いられる固形描画材と絵具を組み合わせた活動である。描くことを苦手とする学生がいる一方で、描くことが好きで得意な学生もいる。平易な題材が続くとかえって意欲が低下することが懸念される。ある程度授業に慣れてきたこの時点で能力の差が見える題材として設定した。保育者に高度な表現力は不要と考えるが、対象を観察しその特徴をとらえることは大切である。描くことを通じて感性を培い、描画材の特徴を理解する題材である。

【活動概要】

- ①植物をスケッチする(事前学習)。花と葉と茎のある植物を写実的に描くことを条件とした。
- ②スケッチをもとに、構図を考え、画用紙(8切)にクレヨンの線で描く。クレヨンの色は自由に用いる。
- ③適切な水加減で用意した水彩絵具を塗り重ねる。絵具の色は自由に用いる(図2)。

④次の授業で、展示された製作物を鑑賞する。

【学生の様子】

事前にスケッチをしていたことで、描画に苦手意識を持つ学生も安心して描くことができた。下がきなしにクレヨンで描くことで緊張感のある線で描くことができた。塗り重ねる水彩絵具の色の選択に悩む場面も見られた。鑑賞活動では、製作物のよさの基準を複数設定することで、それぞれのよさを感じ取ることができた。

(5) 平面造形の技法 マーブリング

【題材設定】

偶然できる複雑な模様を楽しむ活動であり、色と形の美しさを感じ取る題材である。

【活動概要】

そめ用和紙（B6）に染料8色を自由に用いて表現する。1人2枚の製作とする。

※製作物はコラージュに使用。

【学生の様子】

マーブリングの経験のない学生はもちろんのこと、小・中学校で経験していた学生も、水面に和紙を浸すと模様が透けて浮かび上がる様子を驚きの声を上げていた。技術的な難しさはなく、すぐ結果が得られるので楽しんで活動することができた。

(6) 平面造形の技法 スパッターリング

【題材設定】

スパッターリングはモダンテクニックの表現技法だが、型を用いることで孔版のステンシルと同様な効果が得られるため、型を用いた版表現の一種と位置付けた。模様をつくるという感覚の活動である。

【活動概要】

- ①好きな色の色画用紙（13.5×9.5 cm）を選ぶ。
 - ②画用紙を不定形に細断し、色画用紙の上にランダムに散らし、色画用紙と調和する色でスパッターリングをする。
 - ③同じ作業を繰り返す。絵具は1回目と色を変える。
- ※製作物はコラージュに使用。

【学生の様子】

技法表現あるいはモダンテクニックとして小・中

学校で体験した学生もいた。模様をつくる活動は新鮮に感じたようで意欲的に取り組んだ。

(7) 平面造形の技法 コラージュ

【題材設定】

平面造形表現のグループ活動に適した活動として設定した。材料と技法だけを指定してテーマを考えることで発想力を、協力して製作することでコミュニケーション力を伸ばす題材である。

【活動概要】

- ①指定された3～4人のグループで自由にテーマを考え、アイデアスケッチをする（事前学習）。
- ②アイデアスケッチをもとに、グループで協力して材料（和紙染、マーブリング、スパッターリングの製作物と各自が持ち寄った紙素材）をハサミで加工し、色模造紙（72.8×51.54 cm）に貼って表現する。
- ③必要に応じてマーカーで描き加えをする（図3）。
- ④次の授業で、展示された製作物を鑑賞する。

【学生の様子】

造形表現活動に苦手意識を持つ学生でもグループ活動になると楽しく活動できるようになる。画面が大きくなったことで、内容を発展させるグループも出てきた。大きな製作物が完成することで達成感を味わうことができた。

(8) 紙類 はり絵

【題材設定】

色画用紙（50色程度）を活用した平面造形表現である。材料の色画用紙は紙工作などで使い残した端材をストックして用いている。造形表現活動によって生じたゴミを再利用する試みでもある。触覚を通して表現材料の特徴を理解し、配色の美しさや表現の多様性を学習する題材である。

【活動概要】

- ①「おしゃれな○○」というテーマでアイデアスケッチする（事前学習）。生き物をモチーフとし、配色は自由とし（ただし2色以上）、円形または半円形を顔として用いることを条件とした。
- ②アイデアスケッチをもとに、台紙の画用紙（8切）にレイアウトを考え、自由に選んだ色画用紙から

コンパスカッターで切り出した円形または半円形の顔をでんぷん糊で貼る。

③自由に選んだ色画用紙を手でちぎり、揉むなどしてテクスチャアをつけ、でんぷん糊で貼り、必要に応じてマーカーで描画を加えて表現する(図4)。

④次の授業で、展示された製作物を鑑賞する。

【学生の様子】

設定した1コマでは完成せず、2コマで完成させた。紙をちぎり糊で貼るといった単純な行為が続くことを楽しんでいた。描画が苦手な学生もはり絵の表現であれば積極的に活動できた。鑑賞では同じモチーフでありながら異なる表現があることから、表現の多様性を感じ取ることができた。

(9) 紙類 紙製品の表現

【題材設定】

子どもの立体造形表現活動では紙類を用いることが多い。現代の生活の中には様々な紙類があふれている。その中で平面材よりも紙製品から発想し表現することの方が適切と考え、入手しやすく安価な紙皿と紙コップを用いた。紙類の加工方法と接着や接合方法を習得できる題材である。

【活動概要】

①アイデアスケッチをする(事前学習)。「2つ折りした紙皿からつくるゆるる玩具」「紙コップからつくる生き物」「紙皿と紙コップを組み合わせでつくるペーパーアート」の3つを作例として提示し、作例以外の製作も認めた。

②アイデアスケッチをもとに、加工に適切な用具を使い、必要に応じて描画材や紙素材を用いて製作する(図5)。

③次の授業で、展示された製作物を鑑賞する。

【学生の様子】

作例をもとに学生の関心や能力に応じて活動した。表現意図に応じて、描いたり、色をぬったり、色画用紙を貼ったりするなど工夫して表現した。作例以外の製作を行う学生もいた。鑑賞の際、同じ作例から様々な発想や表現方法あることに気づき、多様な表現のよさを感じ取ることができた。

(10) 人工素材 樹脂製品と金属製品の表現

子どもの立体造形表現活動で人工素材を用いるときはリサイクル材料を活用することが多い。生活の中で不要となったペットボトルをはじめとする樹脂製品、アルミ缶やスチール缶などの金属製品を用いることは、資源の有効活用にもつながる。環境問題の意識をもち、樹脂製品や金属製品を用いた活動を通して、人工素材の加工方法、接着や接合方法を習得できる題材である。

【活動概要】

①アイデアスケッチをする(事前学習)。「ペットボトルからつくる人形」「アルミ缶からつくる人形」「スチール缶からつくるさかな」の3つを作例として提示し、作例以外の製作も認めた。

②アイデアスケッチをもとに、加工に適切な用具を使い、必要に応じて様々な材料を組み合わせ、材料に応じた接着や接合方法で製作する(図6)。

③次の授業で、展示された製作物を鑑賞する。

【学生の様子】

作例をもとに学生の関心や能力に応じて活動した。表現意図に応じて、色画用紙、フェルト、スズランテープ、スパンコールなど用意した多様な材料を用いて意欲的に活動した。作例以外の製作を行う学生もいた。

(11) 自然素材 土粘土と枝材

【題材設定】

粘土は手指と材料が直接接触し合い、低年齢の幼児でも容易に形づくることから、子どもの立体造形表現活動ではよく用いられている。近年、土粘土を用いた活動は少なくなりつつあるが、泥遊び、泥団子づくりは子どもが大好きな活動であり、体験する価値があると考えた。製作物が残らない造形遊びの体験をする題材である。

【活動概要】

①「オノマトペ」をテーマにアイデアスケッチをする(事前学習)。

②アイデアスケッチをもとに、土粘土でシナベニヤ板上に形づくる。適宜、枝材を組み合わせる。

③長期間の保存には向かないので、写真に撮って完成とする。鑑賞活動はない。

【学生の様子】

夢中になって活動する学生は少なく、土粘土の見た目、感触、臭いに抵抗を示し、短時間の活動で終わる学生が多かった。

(12) 粘土類 軽量紙粘土の表現

【題材設定】

近年、学校教育の中でよく用いられている新しいタイプの粘土を用いた活動である。立体造形表現のグループ活動として設定、発想力とコミュニケーション力を高めることを目的としている。粘土を用いた製作物が残る題材である。

【活動概要】

- ①指定された 3～4 人のグループで自由にテーマを考え、アイデアスケッチをする（事前学習）。
- ②アイデアスケッチをもとに、軽量紙粘土に水彩絵具を練り込んでカラー粘土をつくり、シナベニヤ板上に形づくる（図 7）。
- ③次の授業で、展示された製作物を鑑賞する。

【学生の様子】

土粘土に比べて触り心地がよく、また色がつくことで製作意欲が増した。立体造形活動のグループ活動は、経験したことがない学生が多く、楽しみながら活動することができた。1 つの大きなモチーフをつくるより、グループのメンバーが個々に製作したものをジオラマ風にまとめた活動の方が適していたようである。

IV 「造形 I」の検証

(1) 調査の概要

【調査対象者】

保育・幼児教育学科 1 年生 「造形 I」受講者 43 名（男性 3 名 女性 40 名）

【調査期間】

授業実践：平成 31 年 4 月～令和元年 9 月

アンケート実施：令和元年 9 月

(2) 学生の分類

まず、造形表現の学習意欲は大学入学以前の図工、中学美術の学習経験に左右されると考え、図工、中

学美術に対してどのような印象を持っていたかについて質問を行った。次に高校美術を選択したか否かについて質問を行い、選択しなかった場合はその理由の回答も求めた。その結果、「美術」に対する関心・意欲を基準にして、学生を以下の 4 層に分類した。

図工、中学美術ともに良い印象を持ち高校美術を選択した学生（8 人）は「美術」に対して関心・意欲が高い層である。図工、中学美術ともに良い印象を持っていたが高校美術は選択しなかった学生（24 人）は「美術」に対してある程度の関心・意欲を持つ層である。図工には良い印象を持っていたが中学美術には良い印象は持たず高校美術を選択しなかった学生（4 人）は「美術」に対してあまり関心・意欲が高くなくやや苦手意識もある層である。図工、中学美術ともに良い印象は持たず高校美術を選択しなかった学生（7 人）は「美術」に対して関心・意欲が低く苦手意識がある層である。以上の 4 層を順に A 層、B 層、C 層、D 層とする。

中学美術に良い印象がなければ高校美術を選択しないことは当然だと考えられる。中学美術に良い印象を持ちながら高校美術を選択しなかった場合、その理由を明らかにすることが必要と考えた。その理由を記述内容から「他の教科（音楽や書道）をすすんで選んだ」（15 人）、「美術がなく選択の余地がなかった」（3 人）、「美術が苦手だった」（5 人）、「理由不明」（1 人）の 4 つに分類した。「他の教科をすすんで選んだ」は B 層と判断し、「美術が苦手だった」と「理由不明」は C 層と判断した。「美術がなく選択の余地がなかった」学生のうち、「美術があれば選んでいた」と答えた 2 人は A 層と判断し、答えのなかった 1 人は C 層と判断した。以上の結果から次のように分類した。

- ・A 層（10 人／23%）：図工、中学美術ともに良い印象があり高校美術を選択した学生（8 人）と、高校美術がなかったが、あれば選んでいた学生（2 人）。
- ・B 層（15 人／35%）：図工、中学美術ともに良い印象があったが、他の教科をすすんで選択したことで高校美術を選択しなかった学生。
- ・C 層（11 人／26%）：図工、中学美術ともに良い印象があったが美術が苦手だったので高校美術を

選択しなかった学生（5人）、図工には良い印象があったが中学美術には良い印象がなく高校美術を選択しなかった学生（4人）、高校美術がなく、あった場合に選んでいたか不明な学生（1人）、高校美術を選ばなかった理由が不明な学生（1人）。

- ・D層（7人／16%）：図工、中学美術ともに良い印象がなく高校美術を選択しなかった学生。

（3）評価の分析

授業終了後のアンケートの記述内容から肯定的な評価であるか否かを判断した。また、記述内容を「表現活動」「保育現場での活用」「知識や技能の習得」「グループ製作」「鑑賞活動」「肯定的な心情の表明」「授業の方法や授業者に対する意見」の7項目に分類した。なお、学生の記述内容は原文のままとした。ただし明らかな誤字は訂正した（太字部分）。

【A層の学生の評価】

- ・想像していたのと違っただけど楽しかった。
- ・アイデアを考えるのは大変だったけどつくるのは楽しかったです。
- ・とても楽しい授業でした。特にグループでの活動で、みんなで楽しんでの製作が楽しかったです。
- ・沢山の知識や、沢山の製作物をつくることができとても楽しく取り組むことができました。ここで学んだことを保育の場でいかしたいと思います。
- ・可愛い物をたくさんつくることができ、とても楽しかった。保育園で教えてあげたいと思った。
- ・とても楽しかったし、小さい頃につくったものをあらためてつくることができ再確認することでよかったですと思う。
- ・自由に作れて楽しかった。自分の好きなように作れたから良かった。評価を気にせず作れた。
- ・毎回いろいろな絵を描くことや、製作物を作り、今後実践していく上でためになりました。
- ・保育園で、何をつくりたいすればいいかなで、あんまり分かんなかったけど、この授業でいろんなアイデアを教えてもらって、これから活かせそうだなと思った。
- ・造形の授業を通して、沢山のモノを創ることができて、かつ、友人と交流（グループで）できて、

非常に充実しました。また語句もたくさん習得できて、保育の現場で少しでも役に立つと感じた。

【評価の分析】

10人すべての記述において肯定的な評価であると判断した（100%）。記述で最も多かったのは表現活動（6人／60%）、次いで保育現場での活用（5人／50%）、肯定的な心情の表明（3人／33%）であり、知識や技能の習得（2人／20%）とグループ製作の（2人／20%）は同数であった。鑑賞活動と授業の方法や授業者に対する意見はなかった。関心・意欲が高い層のためどのような題材でも肯定的に評価したと考えられる。鑑賞に関する記述がなかったことは、製作に関心が偏っていた可能性が考えられる。

【B層の学生の評価】

- ・中学ぶりに何かものをつくるという体験をしたので予想図を描くのは大変だったけど作るのは楽しかった。
- ・絵を描いたり、作品を作ったりするのは苦手でしたが、この授業を通して、少しでも好きになれた気がします。なので良かったです。子どもでも作れるような作品も知れたので良かったです。これからは色々な作品を知りたいと思いました。
- ・たくさん作品を作れて楽しかった。先生の説明が長くて、作品をつくる時間がみじかかった。
- ・毎回楽しくて、造形への愛が高まりました。就職する時に、造形をたくさん深く取り入れている園を選びたいと思っています。
- ・最初は大変そうだなと思ったけど、いざ授業を受けてみると、とても楽しいなと思いました。作品を作るのがたのしかったです。
- ・将来、自分が子どもたちに教える立場になることを思うと、造形Iで学ぶことができよかったです感じています。
- ・時間が足りなかったり、思い通りにできなかつたりしたが楽しかった。鑑賞の時、名前を伏せると人で選ぶことが無くなるのではと思った。
- ・実際、保育の現場に行った時に、使えるような知識をたくさん得ました。
- ・思っていた以上に楽しんで作ることができた。ワークシートを解くのは大変だった。

- ・絵が苦手でも簡単に作れるものが多く楽しかった。紙ねんどの製作が楽しかった。
- ・造形を通して様々な作品をつくることができました。イメージ通りに行く作品や行かない作品それぞれでしたが、次は、がんばろう！と思えました。将来実践してみたいと思えるものもたくさんあったので、行ってみたいです。
- ・今まで自分が知らなかった技術を学べて、保育現場で活かしたいと思った。子どもと製作する時には、子どもの発達に合わせた製作を選べるようにしたい。
- ・楽しくできて良かったです。
- ・いろいろな作品を作れてたのしかったです。保育で実践したいです。

※記述なし1名

【評価の分析】

15人中13人が肯定的な評価であると判断した(87%)。残り2人の評価は肯定的とは言えないが否定的ともいえないと考えられる。記述で最も多かったのは表現活動(6人/40%)と肯定的な心情の表明(6人/40%)。次いで保育現場での活用(5人/33%)、知識・技能の習得(4人/27%)、授業の方法や授業者に対する意見(3人/20%)の順となった。グループ製作と鑑賞活動の記述はなかった。ある程度の関心・意欲を持つ層のため肯定的な評価が多かったと考えられる。鑑賞に関する記述がなかったことは、ここでも製作に関心が偏っていた可能性が考えられる。

【C層の学生の評価】

- ・グループ机で対面式で授業するため、班の人とコミュニケーションを取りながら製作が出来楽しかった。
- ・説明が少し長いと感じた。色々な作品を作れて楽しかった。
- ・グループ製作ではグループの人と楽しく表現できて良かったです。個人の製作も1つ1つ最後まで製作できてよかったです。
- ・保育士として働くときにただ製作を一緒に作るのではなく、子どもの成長にどう繋がるか考えて活

動できるようになった。

- ・絵を描いたり、作品を作るのは苦手な方だけど人の作品を見て親しむことができた。
- ・色んな物が作れて、楽しかった。想像したりするのが楽しかった。
- ・色んな作品を作ることができ、色んな技法を使って作品を作ることができて楽しかったです。自分が作った作品からグループで協力してまた一つの作品を作るのも、協力してできたことと、大きな作品をみんなで作れたのでとても楽しかったです。
- ・たくさんいろいろなものをつくりました。材料も特徴をつかみながらできたと思います。仕事をするときに役に立つと思いました。
- ・初めて見る、触るものがありとても楽しかった。周りの人の作品を見て、こういう工夫もあると理解したりしてとてもおもしろかった。
- ・いろいろな作品を作って楽しかった。
- ・作品をつくるのが多くとても勉強になったし楽しかったです。

【評価の分析】

11人中10人が肯定的な評価であると判断した(91%)。記述で最も多かったのはやはり表現活動(7人/64%)。次いでグループ製作(3人/27%)で、保育現場での活用(2人/18%)、鑑賞活動(2人/18%)、肯定的な心情の表明(2人/18%)が同数で続き、知識・技能の習得(1人/9%)、授業の方法や授業者に対する意見(1人/9%)の順となり、すべての項目の記述があった。あまり関心・意欲が高くなくやや苦手意識もある層にもかかわらず肯定的な評価が多かった。

【D層の学生の評価】

- ・その時間内に製作することができたのでよかったです。
- ・個人活動やグループ活動の両方があって良かった。グループ活動は楽しかった。個性豊かな作品がたくさん見られておもしろかった。
- ・絵が上手くない、製作物の得意でない、でも子どもは大好きだという保育士さんは沢山おられると思います。という先生が最初の授業で言われた言

葉で、前向きに取り組むことが出来ました。デザインが苦手で苦痛になった時期もありましたが、日常生活の中でもっと美術品にも触れ、努力しようと思えるようになりました。家でも色々な物作り〈バスボム、スライム、ハーバリウム〉に挑戦してみました。

- ・楽しく製作することができた。
- ・最初は造形と聞いて難しそうだなと思っていたけど、楽しくやることができたので良かったです。
- ・同じ色を塗る作業でも、指を使ったりクレヨンを使うなど、様々な工夫の仕方を学ぶことができた。作品感想のこう目が多くて同じことを書いてしまう。
- ・色々な材料を使って作品をつくれた。

【評価の分析】

7人中4人が肯定的な評価と判断した(57%)。残りの3人の評価は肯定とも否定ともいえないと考えられる。記述で最も多かったのは肯定的な心情の表明(3人/38%)。次いで表現活動は(2人/29%)となり、知識・技能の習得(1人/13%)、グループ活動は(1人/13%)、鑑賞活動は(1人/13%)、授業の方法や授業者に対する意見(1人/13%)が同数であった。保育現場での活用についての記述はない。関心・意欲が低く苦手意識がある層であり、否定的な評価があることも予想されたが、明らかに否定的な評価はなかった。

【全体の評価の分析】

43人中37人が肯定的評価と判断した(86%)。6人の評価は肯定とも否定ともいえないと考えられる。記述で最も多かったのは表現活動(21人/49%)で、およそ半数が言及している。次いで肯定的な心情の表明(14人/33%)、保育現場での活用(12人/28%)、知識や技能の習得(8人/19%)、グループ制作(6人/14%)、授業の方法や授業者に対する意見(5人/12%)と続き、鑑賞活動(3人/7%)が最も少ない。記述の多さから判断するとB層の学生の評価が最も近く、この層が標準ということが言えるのではない。4つの層で表現活動の記述が最も多く、鑑賞活動の記述が最も少なかった。

V まとめ

(1) 仮説の検証

仮説①について、学生のカテゴリでA層(10人/23%)、B層(15人/35%)、C層(11人/26%)、D層(7人/16%)という4層に分かれたことから裏付けられると考える。B層に記述の中で「苦手」と述べている学生が2名いることから、分類の方法に適切ではないところもあったと考えられる。仮にこの2名がC層に属したとしたとしても、4層のパーセンテージは順に、23%、30%、30%、16%となり、極端な偏りとはならない。

仮説②について、「造形I」が、図工、中学美術、高校美術とは異なり楽しんでいたことは、学生の記述からも明らかであると考えられる。C層の学生が肯定的な評価を上げていたことが裏付けである。D層の学生の肯定的な評価がもっと高ければより明確になったであろう。

仮説③と④は表裏一体の関係にある。D層の学生の評価の肯定的評価がやや低かったものの、肯定的な評価は半数を超え、明らかに否定的な評価はない。また、C層の学生の評価がB層の学生の評価を上回っていたことは、「造形I」の授業が適切であった可能性が高いことを明らかにしている。

(2) 「造形I」の評価

「造形I」では12の造形表現活動を行い、ほとんどの題材で学生は積極的に活動できた。「土粘土と枝材」だけが不評であった。子どもの造形表現活動で取り上げられている平面造形表現と立体造形表現の両方を体験し、個人制作とグループ制作の両方を行った。表現活動についての記述が多かったことから適切な題材であったと考える。その一方で、知識・技能の習得と鑑賞活動についての記述が少なかったことの原因を明確にする必要がある。7つの題材で鑑賞活動を行い、学生は熱心に取り組んでいるように見えたが、表現活動ほどの楽しさを感じていなかったのかもしれない。

(3) 今後の課題

学習の成果を「楽しい」だけで判断することには批判もあるだろう。しかし、造形表現活動は本質的

に楽しく、保育者を目指す学生が楽しい経験をする
ことによって、子どもの様々な表現活動を支えるた
めの知識や技能を身につけることが望ましいのでは
ないか。本研究によって、筆者が考える造形表現の
指導の方向性は正しいと考える。

課題として次のことをあげておきたい。まず、学
習環境やカリキュラムの制約から、学生を3グルー
プに分け、3コマ連続で授業を行うことで授業者の
負担は相当なものになった。また、造形表現は単独
で行われるものでなく、音楽表現や身体表現と一体
になりながら子どもの遊びの中で生まれてくること
が望ましい。そうであれば、支援・指導を行っている
保育者の示唆を得て、題材を考えていかなければ
ならないだろう。そして、「造形Ⅰ」を学んだ学生が
保育者となった時、大学での経験がどの程度有効だ
ったかを追跡調査することも必要だと考える。

今後も、1人でも多くの学生が造形表現活動を楽し
み、体験を通して、保育者として必要な資質を身
につけることができる授業を目指していきたい。

参考文献／引用文献／脚注

- 1)平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼
保連携型認定こども園・保育要領 〈原本〉
- 2)樋口一成 2018年 「幼児造形の基礎 乳幼児の造形
表現と造形教材」 萌文書林
- 3)槇英子 2008年 「保育を開く造形表現」 萌文書林
- 4)東山明 2004年 「幼児の造形ワークショップ3」 明
治図書出版株式会社
- 5)富山典子・岩本克子 2001年 「保育に役立つ 絵画
あそび技法百科」 ひかりのくに株式会社
- 6)花篤實・岡田愨吾 2009年 「新造形表現 理論・実
践編」 三晃書房
- 7)三井英樹 2000年 「形の美とは何か」 日本放送教
育出版
- 8)佐藤学・今井康雄 2003年 「子どもたちの想像力を
育む アート教育の思想と実践」 東京大学出版会



(図 1) フィンガーペインティング



(図 4) はり絵



(図 2) バチック



(図 5) 紙製品の表現



(図 3) コラージュ



(図 6) 樹脂製品と金属製品の表現



(図 7) 軽量紙粘土の表現

(表 1) 「造形 I」 調査結果のまとめ

	肯定的 記述	記述内容						
		表現活動 の楽しさ	保育現場 での活用	知識や 技能の 習得	グループ 製作	鑑賞活動	肯定的な 心情の 表明	授業の 方法や 授業者に 対する 意見
A 層 (10 人)	100% (10 人)	60% (6 人)	50% (5 人)	20% (2 人)	20% (2 人)	0% (0 人)	33% (3 人)	0% (0 人)
B 層 (15 人)	87% (13 人)	40% (6 人)	33% (5 人)	27% (4 人)	0% (0 人)	0% (0 人)	40% (6 人)	20% (3 人)
C 層 (11 人)	91% (10 人)	64% (7 人)	18% (2 人)	9% (1 人)	27% (3 人)	18% (2 人)	18% (2 人)	9% (1 人)
D 層 (7 人)	57% (4 人)	29% (2 人)	0% (0 人)	13% (1 人)	13% (1 人)	13% (1 人)	38% (3 人)	13% (1 人)
全体 (43 人)	86% (37 人)	49% (21 人)	28% (12 人)	19% (8 人)	14% (6 人)	7% (3 人)	33% (14 人)	12% (5 人)

A Study of Art Expression in Childcare Training —Class Practice Using a Variety of Expression Materials—

Kato Tomohiko*

Abstract

It is necessary for a childcare worker to have abundant knowledge and skill to support the various art expression activities of the child. Because childcare workers experience rich art expression activities, they have such knowledge and skill. If a student is to be a childcare worker, it is desirable to experience art expression activities before entering school. However, there are students with few such experiences. I planned art expression activity, and all students elaborated on a plan for an art expression class that could teach knowledge and skill.

I put two-dimensional and three-dimensional art, personal production and group production together and carried out a class based a child's art expression activity. I performed a questionnaire after class and investigated student awareness. An affirmative evaluation from both students who had high interest and motivation and those with little interest in art was achieved. It became clear that students enjoy art expression activities through class, which can lead to independent learning. Future tasks include reducing the burden on teachers, devising materials related to other expression areas, and conducting follow-up surveys of learners.

Key words: art expression, training childcare worker, class practice

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address : Kato Tomohiko
〒690-0823 4280 Nishikawatsu-cho, Matsue, Shimane Prefecture
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Welfare
E-mail : t.kato@kenko-fukushi.ac.jp